



中越大震災から8年 「中越」・「東日本」それぞれの“復興”



中越大震災8周年復興祈念企画展「立ち上がる被災地からのメッセージ」
トークセッション

contents

特集① P2-3 中越大震災8周年を振り返る

【シンポジウム】「中越 発 若者を地方に呼び込め！」
【企画展】「立ち上がる被災地からのメッセージ」

特集② P4-5 中越メモリアル回廊 1周年

中越メモリアル回廊 1年の歩み
データで見る中越メモリアル回廊

【シリーズ】「人と人」吉田茂・畔上純一郎 【COSSS リレーエッセイ】「震災遺構」 事務局長 山口壽道

【連載】コラム・視点防災 【その他】インフォメーション、施設のご案内、会員募集

特集①中越大震災8周年を振り返る

2012 10.20

中越大震災8周年企画展
「立ち上がる被災地からのメッセージ」
復興祈念トークセッション・交流会・中越視察



それぞれの復興に向け 「夢」語り合う。

十月二十、二十一日に中越大震災八周年企画展「立ち上がる被災地からのメッセージ」〜復興祈念トークセッション・交流会・中越視察〜を、長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」で開催した。この企画展は、中越地震から八年、東日本大震災から一年半経過した現地の現状と「力強く立ち上がる被災地」を多くの皆様にお伝えすることを目的としている。この企画展の開催に伴い十月二十日に「復興祈念トークセッション・交流会」を実施し、二十三団体、約九十名が参加した。

トークセッションでは、震災前から活動していた宮城県南三陸町の観光ガイドサークル汐風による、「語り部」活動や、震災を機に立ち上がったコミュニティビジネス、地域商店街の空き店舗を利用した、ボランティア用宿泊所の取組など、地域ごとに特色のある取組が紹介された。また同日夜に開催した交流会では、「まちを元に戻すのではなく新しいまちをつくる」など中越・東日本のこれからの「夢」について熱く語りあった。

翌日に行った中越視察では、震災メモリアルパークの整備プロセスや中越メモリアル回廊見学を行った他、「震災の記憶をどう伝えるか」について意見交換

を実施した。

思い起こせば八年前、中越大震災からの復興も「人」と「人」の交流から始まった。平成十九年二月からスタートした「地域復興交流会議」。回数を重ねるごとに内容・参加団体は変わってきたが、人が集まり夢を語り合う場であることは変わらない。「中越」・「東日本」・「福島」それぞれ復興の段階も、地域の課題も違う。しかし、「地域の復興は、人と人が交流にすることよって人が元気になる、それがまちの復興へとつながっていく」そんな事を改めて感じさせる2日間であった。今後も、中越・東日本の復興を支えるための、人と人をつなぐ、「場」であり、「人」でありたい。

企画展「立ち上がる被災地からのメッセージ」は、十一月三十日まで開催している。



2012
10.23

中越大地震8周年
復興祈念シンポジウム
「中越発若者を
地方に呼び込め！」



地方から日本を再生する。

十月二十三日に中越大地震復興祈念シンポジウム「中越発若者を地方に呼び込め！」〜Uターン・Uターン・定住促進による新たな担い手づくりのススメ〜を開催した。このシンポジウムは、中越、東日本、そして全国の中山間地域の課題である「人口の自然減少による担い手不足」の解決について、考えることを目的としている。当日は、行政、地域住民支援団体など約二百名の方が来場した。

第一部のオープニングでは、「中越復興の歩み」のスライドショーを上映した後、中越にインターンや移住してきた若者へインタビューを行った。インタビュー内容は、インターンへ参加した動機や移住を決めたきっかけについて聞いており、「私にしかできないことがある。」や「一人のつながりが強い」などが上げられた。

第二部のパネルディスカッションでは、「若者を地方に呼び込め！」をテーマに地方移住の魅力と課題や現在の実施されている支援制度、今後の展望について七名のパネリスト（※右下の表参照）でディスカッションを行った。多田夫婦からは、「実際に移住し、生活している感じる地域の魅力や課題」、小田切氏からは、「若者が地方に回帰する動機」（仕

事探し、自分探し、貢献の場探し）や、「地方移住の三つのハードル」（住居、コミュニティ、所得）など日本全体の地方移住の動向についての説明がなされた。また、「国や県の支援制度」である地域おこし協力隊制度や「地域復興支援員設置制度」についても説明がなされた。さらに、宮城県の被災地でも、復興は人であり、地域資源であると言ったことも、話題に上がり、「担い手」の問題は全国の地方の課題であることを再認識した。今回のシンポジウムのまとめにもあったが、様々な支援制度があるなか、やはり地域づくりや復興を支えるのは「人」であり、現場である。これからも、地域の方々と共に地域の課題に向き合い、中越・東日本の復興に取り組んで行きたい。

パネリスト (上写真順)	泉田 裕彦 新潟県知事	武居 丈二 総務省 地域力創造審議官	小田切 徳美 明治大学農学部 教授
稲垣 文彦 中越防災安全推進機構 復興デザインセンター 長	多田 美紀 十日町市 地域おこし実行委員会 直販担当	多田 朋孔 十日町市 地域おこし実行委員会 理事・事務局長	伊藤 和彦 宮城県 震災復興・企画部長



特集② - 中越メモリアル回廊1周年 -

震災の記憶を未来へつなぐ。

中越大震災の知見と教訓を未来の安全・安心につなげるために、「中越メモリアル回廊」は、昨年十月二十三日にオープンした。中越メモリアル回廊は三つの施設と三つの公園を拠点とし、中越全体をまるごと情報の保管庫にする試みである。被災の爪痕、避難所の体験談、復旧のあゆみ、復興への想いなど膨大な物語に触れることができる。

回廊のゲートウェイを担い、iPadで復興のあゆみに触れ、中越のコンシェルジュも行っている「長岡震災アーカイブセンターきおくみらい」、地震動シミュレータや避難所の再現などで中越大震災を疑似体験、防災知識を再認識する「おぢや震災ミュージアムそなえ館」、被災を通して育まれた絆の物語を収集・記録し地域交流の未来を築く「川口きずな館」、そして現在、開館準備中の「やまこし復興交流館」がある。

また、三つの公園には、震災の爪痕と被災者追悼の場としての「妙見メモリアルパーク」、土砂ダムによる水没家屋を残し震災復興を伝える「木籠メモリアルパーク」、震源地を保存した「震央メモリアルパーク」がある。

中越メモリアル回廊1周年をむかえた今号では各メモリアル施設の代表者より

一年の振り返りと今後の抱負をお伝えする。



震央メモリアルパーク

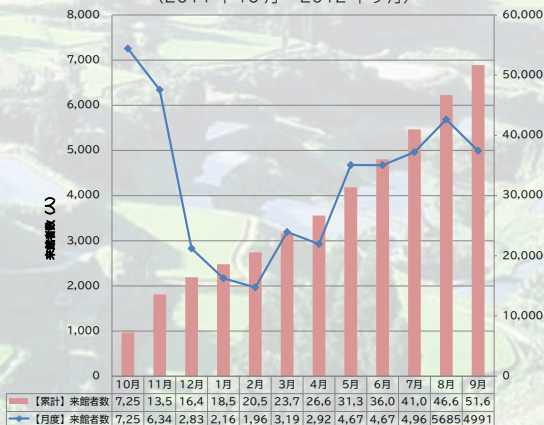


木籠メモリアルパーク

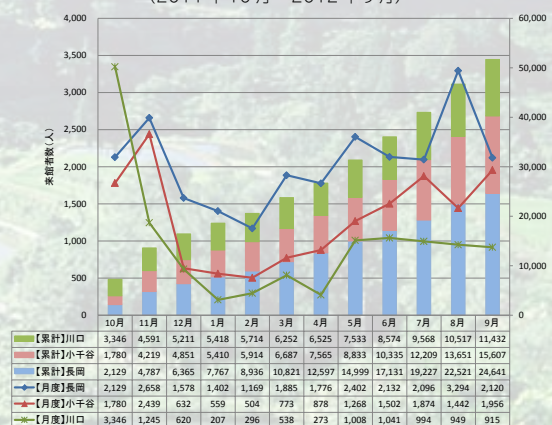


妙見メモリアルパーク

中越メモリアル回廊
【館別・累計・月度】来館者数
(2011年10月～2012年9月)



中越メモリアル回廊
【累計・月度】来館者数
(2011年10月～2012年9月)



データで見るメモリアル回廊

長岡震災アーカイブセンター きおくみらい

研究員 樋口 勲

中越大地震の記憶や記録を伝えるべく、長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」が平成二十三年十月に長岡市大手通にオープンして以来、多くの学校の皆様にご活用いただき、先生とのご相談のもと、多様な学習を進めるお手伝いをさせていただいた。

中越大地震をはじめとする水害、雪害、津波などの自然災害は甚大な被害をもたらす一方で、子どもたちが地域を学び、社会の一員として防災や復興支援を考えるための重要な教材でもある。しかし、学校を取り巻く環境が複雑化する中、学校単独で防災教育や地域教育を展開することは難しく、地域を巻き込みながら展開する方法が効果的かつ効率的と考えらる。

教育現場における私たちの役割は、学校と地域を繋ぎ、共助の精神を育む機会を生み出すことと考えている。地域を学び、地域に愛着と誇りを持ち、地域の防災や発展のために尽力する、そういった人材を今から育成することが次代の人材育成にも繋がっていくと考えている。

おぢや震災ミュージアム そなえ館

総括マネージャー 松本 勝男

中越大地震の体験を活かした防災学習拠点として開館したそなえ館は丸一年で一万八千人弱のお客様に足を運んでいただいた。当初は市民をはじめとした一般来館者が多かったが、現在では団体での来館者が累計で五割を超え、この二ヶ月間は団体が七十パーセントを超えている。そなえ館の「売り」のひとつがナビゲーター（説明員）による団体種別での館内案内である。予約時に来館目的などを聞き取り、館内での解説内容を事前に調査・準備し、案内中に会話形式での防災クイズや震災の教訓をちりばめた行程を組む。さらに、要望によっては地元語り部による講話や独自の研修メニューを提供している。アンケート結果では満足度は高く、自主防災組織リーダー研修会で来館された方が関係者を連れ、再度研修の場として訪れていただくケースも増えている。

これからも来館者のニーズに合わせたオーダーメイドの対応ができるよう研鑽を重ね、多くの防災体験学習プログラムを熟成を図り、「楽しく学んでそなえましょ」のキャッチフレーズに相応し、学びの場となるように努めたいと考えている。

川口きずな館

地域コーディネーター 赤塚 雅之

きずな館は開館以来、東日本大震災被災地域の各種自治体、防災会などの皆さんとの交流を積極的に行ってきた。同時に、川口地域の有志を募り、福島県から新潟に避難されている皆さんの避難所出張まかない事業、避難住民の皆さんをきずな館へ招待するなどの交流事業を展開してきた。特に、中越地震からの復興を祈念した川口を舞台とするイベント「Song of the Earth(SOTE)」では、昨年に引き続き設営段階から事業協力を行い、三千三百十九名の来館者を記録した。きずな館の壁面には、ここを訪れ交流した皆さんの手による「感謝のメッセージボード」があり、そのボードに来館された方がメッセージを追記していくなど、きずな館を通しての交流の輪が広がっている。

川口住民の皆さん、中越地震のボランティアメンバーとして川口を支援してくれた皆さん、東日本大震災の被災地の皆さん、長野北部地震の被災地の皆さんなど、多くの人々が集い、きずな館をステージとした交流の輪を継続的に築き広げ、そんなきずな館を目指して活動していきたいと考えている。

東日本大震災被災地から多くの方々が見学に

	対象期間	団体数・地域	視察人数	視察目的・所属団体
長岡震災アーカイブセンター きおくみらい	平成23年10月～ 平成24年9月	37団体	376名	・復興支援員制度 ・復興計画(復興状況) ・市町村議会 ・国の機関 ・宮城県/岩手県/福島県 ・地方自治体
おぢや震災ミュージアム そなえ館	平成23年10月～ 平成24年9月	20団体	312名	・集団移転(手法・制度) ・復興住宅(公営住宅) ・市町村議会 ・自治会/町内会
川口きずな館	平成23年10月～ 平成24年9月	5団体	124名	・復興状況 ・集団移転(手法・制度) ・地域コミュニティ再生 ・住民有志
山古志地区 ※やまこし復興交流館については未整備。機構を通じての視察	平成23年10月～ 平成24年9月	23団体	237名	・集団移転(手法・制度) ・地域コミュニティ再生 ・復興住宅(公営住宅) ・公共交通(クローバーバス) ・岩手県/宮城県/福島県 ・地方自治体 ・市町村議会

団体名	県	市町村
3月11日を わすれないためにセンター	宮城県	仙台市
南三陸町立戸倉中学校3年生	宮城県	南三陸町
東松島市役所	宮城県	東松島市
震災復興・企画部地域振興支援課	宮城県	仙台市
東北厚生局企画調整課復興支援室	宮城県	仙台市
仙台市議会	宮城県	仙台市
気仙沼市議会産業経済常任委員会	宮城県	気仙沼市
宮城県震災復興企画部	宮城県	仙台市
福島県庁	福島県	福島市
福島県浪江町民(語り部)	福島県	浪江町
葛尾村地域支え合いセンター	福島県	三春町
南相馬市議会	福島県	南相馬市

団体名	県	市町村
新地町民生児童委員協議会	福島県	相馬郡
会津美里町議会 防災特別委員会	福島県	大沼郡
須賀川市議会	福島県	須賀川市
郡山市役所まちづくり政策課	福島県	郡山市
三和地区行政嘱託員協議会	福島県	いわき市
地域再生のための住民力アップ講座	福島県	郡山市
大槌町議会	岩手県	上閉伊郡
陸前高田市長洞地区の皆様	岩手県	陸前高田市
釜石市中越大地震復興事例視察研修会	岩手県	釜石市
大船渡市三陸町崎浜地区復興会議	岩手県	大船渡市
陸前高田市の皆様	岩手県	陸前高田市
3県連携復興センター	広域	

シリーズ 人と人

「つながりをチカラへ」

長岡に来る前に、最初に避難したのは仙台のホテル。一日におにぎり三個しか配給されず、ガソリンは整理券を発行されただけ。これでは長期生活は無理だと思い、南相馬市が用意したバスに乗り込み、行き先も告げられずに到着した先が長岡でした。その夏に初めて山古志と青葉台の交流会に参加し、その時の“人と人”とのつながりが本当に温かったのを今でも覚えています。長岡に来て、たくさんのいろんな人たちに応援してもらいました。「支援」というより「応援」。中越地震を経験し、苦労した皆さんの「応援」だからこそ、我々と一心同体なのだと感じることができます。それがとても嬉しい。

中越地震から8年経っていますが、山古志と青葉台の人たちの交流はいまだに続いていて、絆があることに感動しています。人は一人では生きていけない。人の支えが、力強さや勇気を与えてくれるのだと、長岡に来てあらためて感じています。

吉田 茂

福島県南相馬市出身。
東日本大震災の影響により、2011年7月に長岡市青葉台へ移住。趣味は料理。長岡市川崎にある避難者交流拠点「まわらんしょ」で毎週料理をふるまうのが楽しみの一つ。

畔上 純一郎

長岡市青葉台在住。
「青葉台山古志応援団」を結成、中越地震で避難した山古志の人々を支援。現在は福島からの避難者支援も行っている。青葉台3丁目自主防災会役員。
中越市民防災安全士会会長。

震災の規模は違いますが、中越地震の際、青葉台に避難していた山古志の人たちを支援した経験があったので、東日本大震災で被災された方々が青葉台にも住んでいることを知り、何か役立つことがあるんじゃないかと思いました。山古志の人たちはコミュニティ単位で避難をしましたが、福島の人たちはバラバラに避難して生活しています。田植えや稲刈りなどの協働作業を通して、知らない人同士でも交流を深めてほしいと思い、そのためのきっかけづくりをしたにすぎません。「支援している」ということを意識せずに、自分たちにとって楽しいことをした結果、山古志の人たちにも福島の人たちにも喜んでもらったのかもしれない。普段から地域のみんなで地域をつくっていく、みんなができることをやっていく、ということを中心にしています。支援することによって、青葉台の地域の人たちの結束力も強くなりました。支援は“人と人”との結びつき、なんですね。

「震災遺構」 事務局長 山口 壽道

「東日本大震災の過酷な現実をどこまで伝え、どこまで残すべきなのだろうか」。中越に視察に訪れた一人の男性が問いかけてきた。彼は、東日本大震災によって様々な被害を受けた被災者と日々向き合っている自治体の職員だった。しかも、彼はこの大震災で二人のご家族を失っていた。東日本大震災から一年半の歳月が流れている今日、被災地域の復興を推し進めるうえで、ほとんどの自治体が「震災遺構」の取り扱いは苦慮していると彼は訴えるように言う。悲痛な叫びに聞こえた。しかし彼は一方で、この問題から逃げることも、避けて通ることもできないと自覚していた。

今、東北の各地で被害を受けた建物や建造物を保存し、後世に記録として残そうとする動きがある一方で、震災遺構が「観光資源化」してしまうのではないかと危惧する声も大きい。東日本大震災で身内を亡くされたご遺族の方々にとって、無残な津波被害の跡を人為的に残し、ずっと見続けていくことは大変難しいことだとする意見が、あちこちからあがっていることも想像に難くない。なのに、どうして「震災遺構」なのか。彼はこうも言う。「今、私は自分の脳裏から、あの東日本大震災の記憶が薄れていくことではないと断言できる。もし、万が一津波が再度押し寄せたなら、どうあっても残された家族を高台に逃がし、一人の命

も失うことはしない」「だが、これから生まれてくる私の孫が、私たちの子孫が大津波から逃げ切れるかどうか分からない。彼らには、あの恐ろしい体験も記憶もないのだから」

中越大震災の現場には、「震災遺構」として、三つのメモリアルパークが整備されている。一つは「震災メモリアルパーク（はじまりの公園）」で、地下十三キロの震源地の上に整備されている。もう一つは「木籠メモリアルパーク（記憶の公園）」で、山古志の地にある。ここは、大規模な土砂崩落によって河川（芋川）が堰き止められ水没した家屋をそのまま残し、その惨状を今に伝えている。

最後の一つは「妙見メモリアルパーク（祈りの公園）」で、家族三人が乗っていた自動車が見地先を通過する折に大崩落に巻き込まれて、二人の尊い人命を失った場所である。しかし一方で、一人の幼い命（当時二歳の男児）は、九十二時間を経て救出された。人間の生存限界が七十二時間（三日）といわれているなか、この奇跡の救出劇は、私たちに多くの教訓と人間の英知を伝えている。

「震災遺構」を考えるとき、中越の現場では、何を残すから議論をスタートさせてはいなかった。私たちは中越を応援してくださった多くの人々への恩返しとして、震災を経験していない多くの人々に「何を伝えるのか」、「何を語り継

がなければならぬのか」から議論を始めてきた。この議論の過程では、地域住民を始め多くの人と機関に関わってもらってきた。結果、本格的な議論から五年余の歳月を要して、ようやく「災害メモリアル拠点整備基本構想」は現実のものとなった。「震災の風化を防止し、後世に記録を残すこと」が構想の原点であり、震災の記憶を風化させないために、地震の恐ろしさを確実に訴え続けることが、「震災遺構」に求められる最大の役割である。



妙見の地には、当時の道路・自動車が今も残されている。

《インフォメーション》

【中越・山の暮らしインターンのブログ始めました。】

中越の“山の暮らし”を体験するプログラム
「中越・山の暮らしインターン」では、インターン生の日々の活動をブログで紹介しています。
ぜひご覧ください。
<http://chuetsu-intern.blogspot.jp/>



【黒条保育園の園児が来ました。】

黒条保育園 43名の園児がながおか市民防災センターを訪ねて来てくれました。防災ダックやボーサイダーの秘密基地を探検してもらい、代表者にボーサイダーの認定証を手渡しました。
ながおか市民防災センターでは視察の受け入れを行っています。
お気軽にお問合せ下さい。



【中越地震復興支援カレンダー 2013 販売開始のお知らせ】

よりみち街道『中越』クラブの活動に賛同し中越地域の美しい風景や人々の暮らしぶりなどの地域の魅力を多くの方々に知ってもらうためフォトコンテスト入賞作品を使用した「2013年版中越地震復興支援カレンダー」を販売をいたします。
1部 1,000円で中越メモリアル回廊3施設(長岡・小千谷・川口)で販売致します。



《コラム・視点防災》

【ロックフェスティバルと防災】

毎年夏に、新潟県南魚沼郡苗場町で開催されている「フジロックフェスティバル '12」に今年も参加してきました。今年は幸運にも3日間とも晴れ。大勢の来場者と相まって、とても暑い3日間となりました。

天候に恵まれた今年の開催でしたが、例年であれば3日間の開催中には必ず雨が降るとも言われるくらい、雨の日となることが多いイベントです。山間部でもあり、昼夜の寒暖の差、天気の変化などに各自で備えて参加することがマナーとなっています。

日中の厳しい暑さの一方、雨天時や深夜は体温を奪われ体力を消耗します。これは災害の避難時に遭遇する状況と共通するものもあります。災害時に満足な場所で過ごせるとは限りません。家にいれば全く気にならないことでも、外で過ごしてみると意外に自然の厳しさを実感します。このようなイベントやレジャーをかねて、もしもの時のことを考えたり、備えてみてはいかがでしょうか。「コレは役に立った、アレが欲しかった」なんて発見があるのでは? (小柳桂太)



会員募集中!

当機構では私たちを応援してくれる会員を募集しています。
地域防災への取り組みや被災地への支援活動に賛同し、応援いただける会員を募集しています。
正会員：年会費5,000円/年
団体賛助会員：100,000円/年
個人賛助会員：3,000円/年
※申込書は当機構ホームページよりダウンロードできます。詳しくは本部事務局までお問い合わせ下さい。

施設のご案内

長岡震災アーカイブセンター きおくみらい

【住所】
〒940-0062
新潟県長岡市大手通 2-6
フェニックス大手イースト 2階
【開館時間】
〔入館無料〕10:00～18:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-39-5525
【FAX】
0258-39-5526
【e-mail】
kiokumirai@cosss.jp

おぢや震災ミュージアム そなえ館

【住所】
〒947-0026
新潟県小千谷市上ノ山 4-4-2
小千谷市民学習センター「楽集館」2階
【開館時間】
〔入館無料〕9:00～17:00
【休館日】
毎週水曜日 年末年始
【TEL】
0258-89-7480
【FAX】
0258-89-7485
【e-mail】
sonae@cosss.jp

川口きずな館

【住所】
〒949-7503
新潟県長岡市川口中山 144-1
川口運動公園内
【開館時間】
〔入館無料〕10:00～17:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-89-3620
【FAX】
0258-89-3621
【e-mail】
kawaguchi-info@cosss.jp

ながおか市民防災センター

【住所】
〒940-0082
新潟県長岡市千歳 1-3-85
ながおか市民防災センター 2階
【開館時間】
〔入館無料〕9:00～18:00
【休館日】
年末年始
【TEL】
0258-36-8141
【FAX】
0258-86-7789
【e-mail】
info@cosss.jp

やまこし復興交流館 準備室

【住所】
〒940-0204
新潟県長岡市山古志竹沢甲 1377
山の学校(通称ロータリーハウス)
【TEL】
0258-41-1203
【FAX】
0258-41-1204
【e-mail】
memorial@cosss.jp

社団法人 中越防災安全推進機構 機関誌 <COSSS report> 第1号 2012年11月発行

発行人: 山口壽道 編集: 小柳桂太 関谷央子 日野正基 松井千明 制作・デザイン: 日野正基
〒940-0062 新潟県長岡市大手通り 2-6 フェニックス大手イースト 2F 長岡震災アーカイブセンター-きおくみらい内
TEL: 0258-39-5525 FAX: 0258-39-5526
E-mail: info@cosss.jp <http://c-bosai-anzen-kikou.jp/>